した。

(30)「夢遊天姥吟留別」の翻訳・訓読については『漢詩大系8　李白』(青木正兒／集英社／一九六五)を参考にした。

(31)〝此詩題名一作〈別東魯諸公〉…(中略)…離開東魯南下越中時作。李白將這是一首、寫夢遊名山的奇特詩篇〟『唐詩三百首新注』(金性尭／上海古籍出版社／一九八〇)

(32)杜甫の詩の翻訳・訓読には『漢詩大系9　杜甫』(目加田誠／集英社／一九六五)、『中国詩人選集10　杜甫下』(黒川洋一／岩波書店／一九五九)を参考にした。「重經昭陵」についても同様。

「熊」「羆」の相互作用

荒木達雄

すでに私は『生物学的に見た「魯山山行」の熊』という少々変わった題で、『魯山山行』の中に現れる「熊」の効果を考えるために、当時の人々が一般に持っていたと思われる実際の熊のイメージを詩における用例ではなく、生態を中心に推測していくという作業を行った。このレポートに関して教官ならびに先輩方に批評していただき、新たな問題点を得たことが本レポート執筆のきっかけのひとつである。また、私が手をつけなかった詩文中における熊のイメージをまとめた安西明秀氏の研究を受けて新たに感じたことも盛り込むつもりである。

まずは、私が感じた問題点をまとめておきたい。

一・「熊」の何が気になるのか

前回の『生物学的に見た「魯山山行」の熊』(以下、「前作」と表す)では、「生態系から考えて『魯山山行』の熊はツキノワグマである。そしてツキノワグマは凶暴で人を襲うという性質のものではないから、この詩においては『怖

さ』の表現というよりは『熊の珍しさ→異世界』の表現と見たほうが適当であろう」という結論に達した。

以上の結果には、今でもそれなりの自信を持っている。しかし、データの正確、不正確以前の問題がほかに存在することに気づいた。教官・先輩諸氏のご意見の中に、「本当に熊はそれほどまで知られていないようなものだったのか」「それでも熊といえば『強い』『怖い』という効果は否定しきれない」というものがあり、この二点が特に気になったのである。

一方、安西氏の研究から感じたことは、私も彼も「熊」についてのみ調べたのであるが、彼の研究結果において「熊」とともに「羆」が出てくるケースが非常に多いことであった。前作ではこのことに関して、ほんの少し触れただけで終わらせてしまった。しかし、この二者が同時に出てくる資料を多く使えば使うほど、「熊」のみのイメージを推測することからは離れていくのではないか。極端な言い方をすれば、『「熊」のみのイメージ』というものは存在し得るのか、ということでもある。

今回の主要な課題はだいたい以上に示したものである。これらを見ていくために、「熊」「羆」「熊羆」の現れる資料に当たり、それらのイメージがどのようであり、またどのように変化していったのか、さらには宋代にはどのようなものでありえたのか、を考えてみたい。念のために申し上げるが、本レポートで言う「熊のイメージ」とは、「文字に現れる熊」のそれであり、実際に熊を見てどう感じたか、ということではない。

二・方針について

まず、前提として「ツキノワグマ＝熊」、「ヒグマ＝羆」という定義をしておく。この定義を確実なものとするにはより詳しい考察を必要とするのではあるが、本稿では前作の結果から、この前提を採用することにする。

前作でも少し書いたが、ツキノワグマに比べてヒグマは体も大きく、肉食の傾向も強い。人に遭遇してその人を襲

う確率もツキノワグマよりはるかに高い。簡潔に言えば、「ヒグマは強い」という印象を抱きやすい。このヒグマがツキノワグマとセットになり、「熊羆」という語を形成した後、この語が「ヒグマは強い」という印象を引き継ぐ可能性は高い。現に「熊羆」を辞書で引けば、「勇敢な兵士のたとえ」と出ている。そうなれば、「熊」にもその印象が移ることはあるだろう。かくして少なくとも「文字上の熊」が強く、怖くなるのではないか。

このことを実証するためには「羆は強い、恐ろしい」、「熊羆は強い」、「熊は強い」の三点の存在と変化とをはっきりさせなければならない。これ以降は、このことを確かめる資料の提示に費やしたい。

三・「熊」、「羆」の独立期

まずは春秋戦国期までの資料を見る。その前に、このレポートの根幹に関わる大前提がある。最初に熊あるいは羆という字を用いた人々は、直接に、そうでなくてもかなり身近にそれらの動物を知っていたはずである。だから、そのころのこれらの文字には私が前作で明らかにしたような実際のツキノワグマやヒグマに近いイメージが付されていたであろうと仮定する。熊はそれほど脅威ではなく羆がより恐ろしかったのである。この仮定を（賛成不賛成には関わりなく）理解していただかないと、この後の論は進まない。

まず、何らかの特別なイメージが希薄な、単なる（？）動物として書かれている例。

厥貢璆、鐵・銀・鏤・砮・磬・熊・羆・狐・豹・狸・織布。（厥の貢は、鉄・銀・鏤・砮・磬・熊・羆・狐・豹・狸・織布）

『尚書』禹貢[1]（傍線は筆者。以下同じ。）

梁州について述べた箇所。ここでは同州から収められる貢を列記している。熊と羆が並んで記されているが、実際の動物の名としてあげられているに過ぎない。これは安西氏の研究でも提示されている『詩経』の例（大雅・韓奕）にも通じるところがあるだろう。その詩の最後にもう一度羆は登場する。今度は熊を伴ってはいない。

献其貔皮、赤豹黄羆　（其の貔皮／赤豹、黄熊を献ず）『詩経』大雅・韓奕

このころには熊と羆は別の生き物だとはっきり認識されていたのではなかろうか。とはいえ、両者は非常に似通った生き物である。後の文献ではあるが『説文解字』[2]でも『爾雅』[3]でも、「羆は熊に似ている」と記している。見た目の非常に似ている両者がセットになりやすいのは自然な成り行きであると言ってよい。問題は恐らくそうしてできた「熊羆」がどういうイメージを持って受け取られるか、である。

四・「熊」と「羆」の相互作用とイメージの拡大

前作で述べたように、人目につきにくい、という生態から考えれば、その分人が勝手に「熊」に関する不思議な空想をめぐらせ、「熊」に神秘的なイメージが付されるのだ、と言える。なお、私が用いる場合の「神秘的」は「リアルな実生活の感覚とは異なる感覚。常識ではよくわからない不思議なもの、雰囲気」といった程度の意味である。

「熊」に神秘的なイメージが付される例は多いのだが、特に夢に関わるもの、暗示的なもの、死者に関わるものが多いようである。『春秋左氏伝』で晋公が病気になったときの話がある。晋公の病気がなかなか治らぬ、と子産が相談を受けた。聞けば晋公の夢に黄色い熊が現れたのだと言う。これに対する子産の答えは、「それは尭に殺された鯀（禹の父）である。晋は盟主なのだから祀ってやらなくてはいけない」というものだった。そこで臣下の宣子が祀ったところ、晋公の病気は治ったのだという。（『春秋左氏伝』昭公七年）

安西氏の研究にあるように、鯀が黄熊に変わった、という伝説があるが、ここでは、「熊」が単独で神秘的なイメージを持ち得る、という例として挙げてもよかろう。先に私は熊と羆は組になりやすいと述べたが、「熊羆」という語では同様の神秘的イメージは表現されるのだろうか。「熊羆」という単語ではないが、両者に神秘性が添えられているものには、前作および安西氏も挙げている『詩経』小雅・斯干の例[4]がある。

『漢書』の例も引いてみる。武帝の孫で後に太子の位を廃されて昌邑王となる劉賀が不思議な出来事に遭った。首のない白い犬を見たり、巨大な鳥が宮中に来るのを見たりした。その一連の出来事のひとつ。

後見熊，左右皆莫見（後ろに熊を見る、左右皆見る莫し）『漢書』武五子伝[5]

この時賀は、「どうして不吉なものがたびたびくるのか」と聞いた。確かに首のない白い犬は怖いし、不吉である。巨大な鳥も普通都にいるものではない。これらとともに熊が出てくるのである。必ず不吉なのかどうかはさておくとしても（「男子之祥」のときは不吉ではない）、熊に何らかの暗示的な役割を意識していたことは間違いなかろう。そして、この場合羆は特に必要なわけではない。

羆が暗示的な存在として現れるものもある。『漢書』より前の資料であるが、『史記』にある。趙の簡子が病気の間に夢を見た。そこで簡子は天帝のところにいた。熊が出てきて、天帝に命じられて射た。続いて羆が出てきてこれも射た。そして天帝に褒められ、将来を予見したかのような言葉をもらった。後に簡子は道で、夢の中で天帝の側にいた男に会い、あの熊と羆は簡子が将来滅ぼすことになる敵の祖先だったと伝えられた。『史記』の「趙世家」の話[6]である。未来の暗示という神秘的イメージだけではなく、将来の敵、つまり（ある程度）強いもの、という側面も感じられるのではなかろうか。熊と羆（羆については次に述べる）のイメージの混合である。しかし、「羆」に神秘的なイメージが感じられるのは「熊」と共起する場合であり、「熊」のように単独で用いられて神秘的なイメージを表した用例は見当たらなかった。

その羆由来と思われる「強さ、勇ましさ」はどうであろう。

尚桓桓，如虎、如貔、如熊、如羆，于商郊。（尚［ねがは］くは桓桓たること虎のごとく、貔のごとく、熊のごとく、羆のごとく、商郊へ于く）『尚書』牧誓

武王が商の討伐に赴く場面である。これから戦いに行く兵士に向けた言葉であるし、虎も貔も強く勇敢なたとえに

用いられるから、熊と羆にも同様の意味合いが込められていることは疑いない。また、この場面は後に『史記』に再び現れる。

尚桓桓，如虎如羆，如豺如離，于商郊，（尚くは桓桓たること虎のごとく、羆のごとく、豺のごとく、離のごとく、商郊へ于く）『史記』周本紀

『尚書』とほとんど同じ表現である。しかし動物のところが違う。貔が消え、熊が消え、代わりに豺と離が入っている。この場面は全体で見ても『尚書』とほぼ同じなのだが、ここのほかにも多少の文字の違いがある。引用箇所の直前も『尚書』では「勗哉夫子」であるのが『史記』では「勉哉夫子」になっているし、直後も「弗迓克奔」が「不禦克犇」に変わっている。もちろん、司馬遷が参考とした資料が現在知られている『尚書』と一字一句同じだったという保証はなく、何かの理由があって書き換えたとも言い切れない。しかし、かなりの可能性で言えることは、この文を書いた司馬遷は、熊がいなくて羆だけであっても勇敢さを示すのに違和感や不都合さを覚えなかった、ということである。いまだ「勇敢さ」の担い手の主力は羆であったのだ。

しかし、このころから熊が単独でも怖くなっていくのもまた事実である。『漢書』外戚伝の一場面。

建昭中、上幸虎圈闘獣、後宮皆座。熊佚出圈、攀檻欲上殿。左右貴人傅昭儀等皆驚走、馮昭儀直前當熊而立、左右格殺熊。上問：「人情驚懼、何故前當熊？」馮昭儀對曰：「猛獣得人而止、妾恐熊至御座、故以身當之。」元帝嗟嘆、以此倍敬重焉。

（建昭中、上は虎圈闘獣に幸す。後宮皆座す。熊佚れて圈を出で、檻に攀じて殿に上らんと欲す。左右、貴人、傅昭儀等皆驚走す、馮昭儀直ちに前みて熊に当たりて立つ、左右熊を格殺す。上問ふ：「人の情として驚懼するに、何故前みて熊に当たるや」と、馮昭儀対へて曰く：「猛獣人を得て止む、妾熊の御座に至るを恐れ、故に身を以って之に当たれり」と。元帝嗟嘆し、此れを以って倍す敬重す。）

熊を捕らえて檻に入れていたところ、暴れ出して皇帝の方へ向かいそうになったので、馮昭儀が身を挺してこれを防ごうとし、皇帝に誉められた、とある。実際はどうであれ（おとなしい熊でも檻に入れられれば暴れて恐ろしく見えるだろう）、この文章を読んだ人は「熊って猛獣なんだな」と思うには十分である。「文字」としての熊のイメージだ。

この頃には、「熊」と「羆」は基本的には別のものとして、それぞれ別のイメージを持っている。しかし、似ていることからセットになりやすく、時には互いにイメージを与え合うケースも見られるのである。

五・独自性の存続と両者の融合

ここまでは「熊」と「羆」という二種類の単語に関して述べてきた。ここでは「熊羆」というひとつのことばはどのようなイメージを担っているのかを見てみたい。「熊羆」という語自体は安西氏が「熊羆是裘」という句を含んだ詩を提示しているように、『詩経』の頃からある。しかし、四で既に述べたように二つの似た生物を列記したに過ぎないものであり、完全に混合してひとつのイメージを持っているとは言い難い。ここまでに述べたように、各々のもともとのイメージが窺えるからである。「熊羆」というまとまった語の例として認められるものを挙げてみる。

春山百獣所聚也……爰有赤豹、白虎、熊羆……（春山は百獣の聚まる所なり……爰に赤豹、白虎、熊羆有り）

『穆天子伝』[7]

『穆天子伝』は成立年代がはっきりとはわかっていないという難点はあるが、[8]興味深い例なので提示しておきたい。一見ただの動物の羅列のようである。赤い豹と白い虎と熊と羆。ただそれだけともとれるし、それでも何の問題もないとは思う。しかし、主に四で挙げた、羅列の例はそのほとんどが漢字一文字の動物を並べていたことに注目したい。唯一、二文字（黄羆）となっている『詩経』では、「貔皮、赤豹、黄羆」と二文字で揃えてある。後二者が赤、黄と

色で修飾されているのに、前の貔だけ皮なのは何か変な気もしたのだが、なんのことはない、リズムの問題で二文字にせざるを得なかったのだ。そのほかの例は詩ではないからそれほど厳密に考えることもないのかもしれないが、「赤豹、白虎、熊、羆」ではやっぱりどこか変である。「熊羆」は一単語であってほしい。

「熊羆」一単語であったと仮定して、これはどういう意味になるだろうか。繰り返すようだが、「赤豹」はひとつの生き物なのだから、「熊羆」もそれに近くないといけない。しかし「熊羆」なんて生き物は存在しないはずである。

先に私は熊羆という語が結びつきやすいのは両者がほかの動物に比べて非常に似通っているからだ、と書いた。問題はそこにあるようだ。前作で明らかにしたように、ヒグマは中国では北方にしかいない。単純に考えても中国の半分以上の人間はヒグマなど見たこともなく、その存在まで知らない場合も十分ある。そういった人々は羆という文字を見て、熊のような生き物、性質も恐らく同じ、と思うよりほかないだろう。実際に両方を知っていて、似た動物だと思った人はともかく、後からこの語を使う人は「似た動物」ではなく「同じ動物」と見てしまう可能性はある。なにしろ彼らに熊と羆を区別する必要はないのだから。

かといって「熊羆」を動物名として認定することは不可能である。そこで私は『穆天子伝』のこの部分においてのこの語の意味は、「熊や羆」ではなく「熊のたぐい」ぐらいが適当なのではないか、と考える。そうであるとすれば、「熊羆」という語が二つの生き物をまとめた呼び方ではなく、ひとつのまとまったイメージとして受け取られている例、ということになる。両者の融合を示すものと捉えておきたい。

六・「羆」イメージの縮小

ここまでで、熊に関して「神秘的イメージ」「強いイメージ」「羆との同一視」が存在すると述べた。この節では、熊と羆の融合の後、両者はどのように扱われるようになったのかを見ていく。

宋の陸佃の記した『埤雅』[9]には、羆は熊に似ているが、より大きく、首が長く足が長い。立ち上がることができ、人に遇うと引き裂き、つかもうとする、とある。生物としては熊とは別の生き物として、そして強く恐ろしい生き物として認識されていたことになる。しかし一方で、その直後には「熊羆、目は直にして…」と突然熊羆の解説に移り、その後は「熊羆之士」や詩経の「男子之祥」の熊羆の例が引かれている。確かに厳密に言えば違う生物なのだろうが、そのことを常日頃意識しているわけではない…ということだろうか。

柳宗元は「羆説」[10]の中で、「鹿は貔を畏れ、貔は虎を畏れ、虎は羆を畏れる」と書いている。鹿はともかく、その他は「怖い動物」として認識されるべきものである。それらよりも羆は強いのである。また、「甚だ人を害す」とも書いている。「羆」と言われれば知識人たちはある程度一致したイメージを抱くことはできたようである。しかしそれはあくまで実物のヒグマに関してである（ヒグマを目の前にして「熊羆」だ、とはさすがに言わないであろう）。文章の中では「羆」はイメージごと「熊羆」や「熊」に吸収されたのではなかろうか。

概観すれば、唐代以降には「羆」の単独の用例はそう多くはないのではないかと思う。『全唐詩』を例にとると、[11]「熊羆」の使用例が35例、それ以外の「熊」の使用例が74例あったのに対し、「羆」はわずか6例。そのうえ、うち1例は「羆熊」というものであり、「熊羆」「羆熊」のように、直接結びついてはいないものの、同じ詩の中に「熊」の登場するものも2例あり、「羆」単独の例とは少々言いにくい。やはりこのころには中国の大半の人は羆なぞ見たことも聞いたこともなかったのではないか。なにしろ生息域がかけ離れているのである。従来羆が持っていたイメージを伝えるには「熊羆」と言わないとわからない、もしくは「熊」だけで十分だったのではないだろうか。そして、「魯山山行」はそのような状況のもと作られたのである。

七・羆の失業

この後、明『丹鉛總録』、清『清稗類鈔』（中華書局／一九八四年）などを見たが、熊の例では、山奥にすんでいてあまり人とは関わらない動物、凶暴な動物、生態のよくわからない動物、などがあった。一方羆は例も少なく、厳密に分ければ羆は熊とは別、という意識はあったらしいが、宮廷で（北京郊外ならヒグマもいておかしくはない）羆がつかまった、とても大きかった、程度の現実的な記録しかなく、熊と共有していたはずの非現実的な神秘性は見られなかった。[12]

私はこれを、前節で仮定した、「羆」という文字の役割の減少の結果、と考えたい。羆ははじめは熊とは違うイメージの、違う生き物として認識されていたはずだが、言葉として結合したことによってそのイメージが混ざり合った。そしてお互いのイメージを与え合った結果、片方だけでどちらの動物のことも指せるようになった。そうすれば、中国の半数以上の人にとってなじみの薄い羆のほうが使われなくなる可能性が高い。つまり、ある時期以降の「熊」の文字は、ツキノワグマもヒグマも内包していたのではないか。このことを証明するのは困難で、ここでは後世の例から推測することしかできない。『現代漢語詞典』[13]で「羆」を引くと、ただ一言「棕熊のこと」と書いてあるのみである。羆という文字はほとんど機能していないのだ。そして熊が羆のことも指してしまうから（まさに現代日本語の「くま」である）、どの熊なのか、を言うのに、「熊と言っても小さいほうの熊だから『狗熊』（ツキノワグマ）だ」とか「茶色の熊のほうだから『棕熊』だ」とか、いちいち言いなおす必要が生じたのであろう。そうでなければ、羆という字があるのにわざわざ新しい語を作ったりはしない。

「熊」という文字は「熊羆」を仲介に、「羆」の持つ意味をも備えるようになり、イメージのみならず、次第に実際のヒグマを指す用途も担うようになったのだ、と私は考えたい。それはいったいいつごろなのか、断言できるわけではないのだが、今回の資料から察するに唐ぐらいまでには定着していたのでないだろうか。

八・「魯山山行」への適用

さて、それでは「魯山山行」で木に登っている熊の効果はどうなるだろう。前作の結論は、「恐ろしさを醸し出すためではなく、珍しさから来る異世界の表現だ」であった。前節までの考察によれば、熊には神秘的な印象がある一方で、強くて怖いものという印象を持つこともあり得る、ということになる。これは主に文字で「熊」を知っている人々が多いときに起きる現象である。一で述べた、「データの正確、不正確以前の問題」とはこのことである。実際の熊の生態がどうであるかわかっても、それが文字でしか知らない人の認識とまったく同じであることはありえない。本稿で扱った資料は文字の書ける階層の残したものであるから、彼らの「熊」や「羆」のイメージを反映していると言って良い。しかし「魯山山行」の作者・梅堯臣については、単純に知識人一般と同列に扱えない点もある。彼の作った「壽州の宋待制に和す九題・狎鷗亭」[14]に「坐熊望碧水／安得同一致」という表現があるためである。「坐る熊」という描写自体も他に例がなく、珍しいものであるし、この熊からは危険さや恐ろしさは伝わってこない。ひょっとしたら作者は「恐くない熊（＝ツキノワグマ本来の姿）」を知っていたのではあるまいか、と思わせるに十分である。また演習の際に教官から示された熊の図像資料の中には、河南省南陽県と方城県から出土した東漢の画像石がいくつかあった。南陽と方城はそれぞれ魯山から数十キロしか離れていない。そしてそこには『三才圖會』などとは比べものにならないほど、写実的な熊が描かれている（『中国美術全集絵画篇18「画像石画像磚」』上海人民美術出版社一九八八年）。河南省のこの地域は、熊が比較的身近だったのか、それとも何か熊に関係する伝説があり、梅堯臣もそれに触発されたのではないかと想像したくなるほどである。

長くなってしまったので結論をまとめる。熊にはいろいろなイメージがあり、本来の熊（＝ツキノワグマ）の生態からは考えられないようなもの（強い、凶暴、勇敢など）も存在する。これは羆のイメージとの融合によるところが大きい。一方で、前作で見たような、「人との接点が少ない」という熊の性質に起因する、「珍しい」イメージや、そこ

から派生した「不思議な」イメージも存在するし、共存もし得る。「魯山山行」においても、どちらの可能性もあり、両方である可能性もある。それは本ゼミの他のレポートの考察などとも併せ考えたうえで結論付けていくべきものであり、本稿のみで急ぎ確定すべきものではない。

注

（1）『尚書逐字索引』（香港中文大学中国文化研究所編／商務印書館）より引用。以降、『尚書』に関しては同じ。

（2）『説文解字』（中華書局／一九七七年）には「如熊黄白文…」とある。

（3）『爾雅義疏』（郝懿行撰／上海古籍出版社／一九八三年）によれば、『爾雅』には「熊如熊、黄白文」とあり、注に「似熊而長頭高脚、猛憨多力、能拔樹木、関西呼曰貑熊」、邢昺の疏に「説文用爾雅、羆作𤟤、熊羆同類之物、羆尤極猛」とある。「熊如…」の「熊」は文脈から見て、「羆」の誤りと思われる。海陽韓氏蔵版『爾雅郭註補正』では「羆」となっている。ここでも「羆」といえば「強い」という点が強調されている。同時に熊と区別がなされなくなっていく様子もうかがえる。

（4）吉夢維何　維熊維羆　維虺維羆蛇蛇大人占之　維熊維羆　男子之祥　維虺維蛇　女子之祥…

（5）『漢書』（中華書局／一九六二年）より引用。

（6）『史記』（中華書局／一九八二年）によればこの部分は…

居二日半、簡子寤、語大夫曰、我之帝所甚楽。與百神游於鈞天。廣楽九奏萬舞。不類三代之楽、其聲動人心。有一熊欲來援我。帝命我射之。中熊、熊死。又有一羆来。我又射之、中羆羆死。帝甚喜、賜我二笥。皆有副。吾見兒在帝側。帝屬我一翟犬曰、及而子之壯也、以賜之。帝告我、晋國且世衰、七世而亡。嬴姓將大敗周人於范魁之西。而亦不能有也。今余思虞舜之勳。適余將以其胄女孟姚配而七世之孫。董安于受言而書藏之。以扁鵲言告簡子。簡子賜扁鵲田四萬畝。他日簡子出。有人當道。辟之不去、從者怒、將刃之。當道者曰、吾欲有謁於主君。從者以聞。簡子召之。曰、譆、吾有所見子晰也。當道者曰、屏左右。願有謁。簡子屏人。當道者曰、主君之疾、臣在帝側。簡子曰、然、有之。子之見我、我何爲。當道者曰、帝令主君射熊與羆、皆死。簡子曰、是且何也。當道者曰、晋國且有大難、主君首之。帝令主君滅二卿、夫熊與羆皆其祖也。簡子曰、帝賜我二笥皆有副、何也？當道者曰、主君之子將克二國於翟。皆子姓也。簡子曰、吾見兒在帝側、帝屬我一翟犬、曰、及而子之長以賜之。夫兒何謂以賜翟

犬？當道者曰、兒、主君之子也。翟犬者、代之先也。主君之子且必有代。及主君之後嗣、且有革政而胡服、并二國於翟。簡子問其姓而延之以官。當道者曰、臣野人、致帝命耳。遂不見。簡子書藏之府。

(7)　『穆天子伝』（王貽梁　陳建敏選／華東師範大学出版社／一九九四年）より。

(8)　晋代に魏の襄王の墓から発見された。周の穆王の故事が含まれていたためにこの名がつけられた。『周王遊行記』という別名もある。戦国時代の文字で書かれているため、先秦のものかとも言われるが、詳細は不明。晋の郭璞が注を付けた。

(9)　「羆如熊黄白文。羆似熊而大、為獣亦堅中長首高脚従目。能縁能立、遇人側擘而攫之俗云、熊羆眼直、悪人横目。准南子曰……」なお、熊に関しては『三才圖絵』と同じ生態、胆についての説明があり、ほかに孟子の「我所欲熊羆……」が引かれていた。以上は顧棫校本『埤雅』より引用した。

(10)　『欽定全唐文』（啓文出版社／一九六一年）より。

(11)　『寒泉』古典文献全文検索資料庫　を参照した。ほかに『全唐詩』（中華書局／一九六一年）・『全唐詩索引　王維』（中華書局／一九九二年）・『同　李白』（現代出版社／一九九五年）・『同　杜甫』（天津古籍出版社／一九九七年）・『同　白居易』（現代出版社／一九九四年）・『同　元稹』（天津古籍出版社／一九九七年）・『同　韓愈』（中華書局／一九九二年）・『同　李商隠』（中華書局／一九九一年）・『同　温庭筠』（現代出版社／一九九四年）。個別に見てみると（「熊」「羆」の用例には「熊羆」を含まないものとする）、王維：「熊」―5例・「羆」―なし　李白：「熊羆」―2例・「熊」―5例・「羆」―1例　杜甫：「熊羆」―9例・「熊」―8例・「羆」―1例　白居易：「熊羆」―1例・「熊」―2例・「羆」―なし　元稹：「熊羆」―4例・「熊」―5例・「羆」―なし　韓愈：「熊羆」―2例・「熊」―8例・「羆」―1例　李商隠：「熊羆」―1例・「熊」―1例・「羆」―2例　温庭筠：「熊」―1例・「熊羆」「羆」―なし　また、杜甫の「羆」が用いられている詩（『上水遺懐』）は直前の句に「熊」が登場している。

(12)　『清稗類鈔』動物類・一千三百餘斤之羆

康熙時。聖祖幸口外打圍。遇二羆。人不能勝。召獅子攫得之。老獅力盡而斃。小獅亦逸。其羆皮實之以草。置雍和宮殿庭。懸牌於腰間。一重一千三百餘斤。一重八百餘斤。

「熊羆」を除けば、「羆」に関する記述はこれのみである。

(13)　『現代漢語詞典』（中国社会科学院語学研究所詞典編輯所編／一九九六年）

(14)　演習の際に千葉貴氏によって紹介された。全体は以下の通り。　群生自知機／不可欺以異／此雖鷗與馴／鷗亦魚所避／坐熊望

碧水／安得同一致／然此海客心／還應無有愧

「熊升樹」の「升」について

大山　潔

「霜落熊升樹」という一句を読んだ時には不思議な感じがした。それは驚きと共に何かフワフワとした印象を受けたのだ。驚きは恐らく熊は獰猛な動物だという認識から生まれたものであろう。フワフワした感じは「升」の字によるものではないかと考えたが、熊を恐ろしいと思いながら何故フワフワの感じがあり得るのだろうか。この不思議な印象を切っ掛けとして、「升」について考えてみることにした。

「熊升樹」とは熊が木にノボルことであるが、「攀」「登」「上」等もノボルの意味を持っているので、先ずこれらの語について考えることにしたい。[1] 従来熊に対しては、獰猛な野獣というイメージがあり、中でも特徴とされるのは力強い掌と手足の鋭い爪である。もしも「攀」を使うとすれば、文字の形に手が描かれているだけでなく、そのノボリは「しがみついて這い上がる」という手足の動きが伴うノボリであり、更に「攀」にはノボルという語意のほか、手でつかまる、しがみつく[2]などの用法も存在するため、（獰猛な熊のシンボルである）熊掌と爪への連想は必至であろう。これは『魯山山行』に漂う幽静、超逸の境地と釣り合わないだけでなく、それを壊してしまうことさえ予測できる。

「登」の字形にも両足で歩くことを意味する癶（はつ）[3]が含まれるが、「攀」に含まれる「手」ほどには意識されていないかも知れない。また、「登」には「登天」「登仙」のような用法もあり、この場合足の動きは全く感じられない。しかし「登」には「足で踏む[4]」などの用法が存在し、「登攀」「攀登」という熟語もある。「登」によって表現される木登